

携帯電話の利用がパーソナリティに与える影響

佐藤 由香理

宮城学院女子大学 人文科学研究科

目的

日本人の2人に1人が携帯電話を持っている今日、大学生の利用の現状はどうか。そして、その携帯電話を持つことにより、“携帯依存症”などの要因のひとつにも考えられる不安などの感情をどのくらいの人を感じているのだろうか。また、携帯電話を持つことによって、持つ前とのパーソナリティに変化が生じるのかどうか。さらに、これらの変化は利用年数と関わりがあるのか、を検討するのが本研究の目的である。

方法

被験者

宮城学院女子大学の学生94名をランダムに抽出し、アンケートへの協力を依頼した。年齢は回答させなかったが、学年の平均は3.04(SD=0.83)であるため平均年齢は20歳程度であると思われる。

質問紙の構成

現在の利用の状況と、被験者の性格に関する12項目の質問(1. 神経質の程度、2. 不安の程度、3. 落ち着きの程度、4. 話好きの程度、5. 几帳面さの程度、6. のんびりやの程度、7. あせりがちの程度、8. 活動的の程度、9. 心配性の程度、10. 注意深さの程度、11. せわしさを程度、12. 大雑把の程度)。また、携帯電話を持つことによって性格が変化したかどうかに関する8項目の質問(1. 見ることが癖になっている程度、2. 携帯を家に忘れたときの不安の程度、3. 落ち着きがなくなったかどうか、4. 気がきくようになったかどうか、5. 人を気遣うことが多くなったかどうか、6. 友達が増えたかどうか、7. センスがよくなったかどうか)からなり、「かなり」から「まったく」までの5段階評価を求めた。

結果と考察

1. 携帯電話の利用の現状

平均利用年数3.6年。平均月額7910.8円。大学入学前後から携帯電話を持つ傾向があるようだ。

2. 携帯電話を利用することによる性格の変化

「見ることが癖になっている程度」と、「家に忘れたときの不安の程度」は、全体の約90%の人が多少なりとも癖になり、不安を感じている。また、3年以上の利用者の方がその傾向は高い(癖: $F(3, 89)=3.24, p<.05$; 不安: $F(3, 88)=2.47, p<.01$; 図1参照)。

これらの2つのことについては、いつメールや電話が来るか、という未来への不確定事象への不安の現われといえるだろう。また、両者の段階が高いほど、今話題の“携帯依存症”の傾向ともいえるかもしれない。いつでも連絡が取れる、つながっているという安心感を少なからず携帯電話に持っていると考えられる。また、利用年数との関係から、“携帯依存症”の傾向が出るとすれば、3年以上の人の方が確率が高いのではないかと考えられる。

また、友達が増えたかどうかということについては、全体の約60%の人が多少なりとも友達が増えていると回答した。これは、携帯電話を持つことによって、本人に直接連絡できることから、気軽にコミュニケーションがはかれるようになった現われではないかと考えられる。携帯電話を持つことによって、持っている人同士の結びつきを強め、対人関係を作っていくとも考えられる。そして、このつながっているという連帯意識は、さらに安心感にもつながっていき、携帯電話への依存を強めていく可能性もあるかもしれない。半数以上の人の方が友達が増えたと回答したが、このことから携帯電話は、人間関係の構築・維持にもとても関わっているといえるだろう。

その他の性格の変化については、半数以上の人の方がももとの自身の性格は変化していない、という結果になり、性格の変化に利用年数も関わりはなかった。

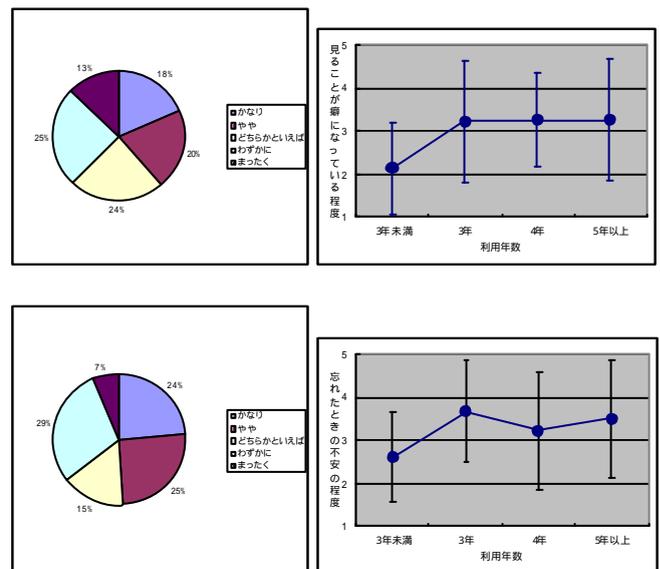


図1: 癖と不安 (上=癖になる程度、下=不安)